

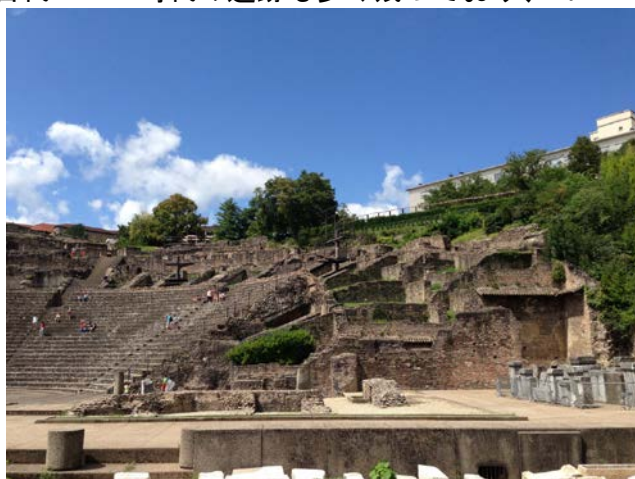
フランス パリ・リヨン

愛知県立芸術大学大学院 村上 仁美

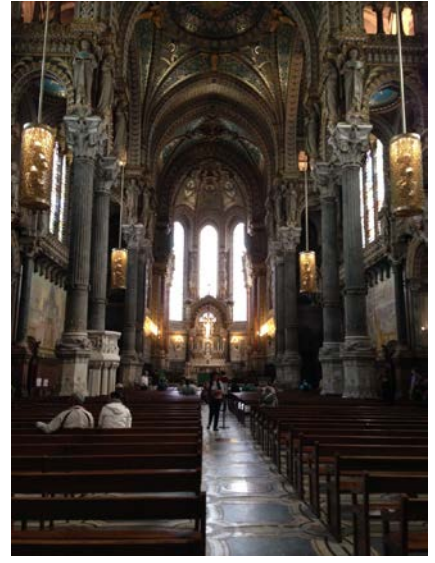
私は今回の研究旅行にて予めから憧れていたフランスのパリとリヨンへ行かせていただきました。古典的な西洋美術に強く憧れる私にとってフランスという国は王道であり、外せない国のひとつです。まず初めに訪れて街、リヨンは街全体が世界遺産にも登録されている非常に古い歴史の街です。街中の至る所に広場があり、彫刻が点在しています。多くの建物に聖母マリアの彫刻が施されています。日本でいうお地蔵さんのような感覚なのでしょうか。



古代ローマ時代の遺跡も多く残っており、ヨーロッパの石の文化を改めて強く感じました。



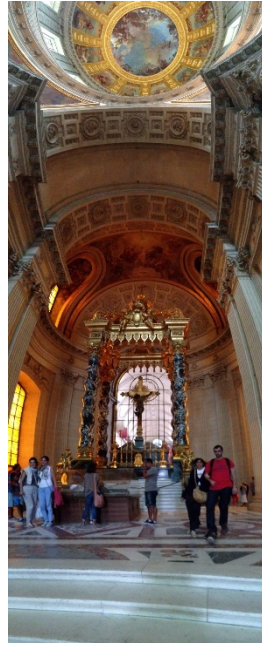
特に素晴らしかったのは街の高台にあるフルビエール大聖堂でした。



パリでは私が彫刻を志す中で非常に影響を受けたロダンとカミーユ・クローデルの作品を見ることが出来ました



ロダン美術館近くのアンヴァリッド廃兵院ではナポレオンの棺や貴重な軍事資料を見ることができました。ここでも豪華絢爛な祭壇を見ることができました。



国策として建設された廃兵院では現在も退役軍人が暮らしているそうです。

日本は宗教的にも文化的も、身近な生活の中から神性や美を感じる能力に長けているように思います、“詫び寂び”に代表されるように、無常観が重要なのです。それは災害の多い風土にも由来しているのでしょう。

この旅で目の当たりにしたフランスの頑強な地盤に支えられて、まるで未来永劫に続く夢の国のように見えました。

そこにあるのは無常観ではなく、恍惚や陶酔といったもののようです。ある意味快樂的に紡がれてきた文化は自然に立ち向かおうとする西洋的な価値観の賜物なのでしょうか。

自身の彫刻観を形成する原点を実際に目にするすることで、今の自分の目指す表現との違いを考えるきっかけになりました。

今後も見聞を広め、表現を深めていきたいです。